

第1 エデンの園における教育

【暗唱聖句】

「まことに神は力に秀でている。神のような教師があるだろうか。」ヨブ記 36 章 22 節

【日曜日・最初の学校】

罪がまだない最初の世界、そこで人間は神様からたくさんのことを学び、成長し、増え広がって行くことが計画されていました。まず、「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされ」ました（創世記 2 章 15 節）。エデンの園の中には見るからに好ましく、食べるに良いあらゆる木がありましたので、人間は何もせずとも生きていけるような環境が整えられていました。しかし、神様は人間に務めや使命を与えられたのです。それが園を耕し、守ることでした。「耕す」という言葉は、「働く」という意味の言葉で、「働く」という言葉は、もともと「仕える」という意味の言葉から来ています。つまり、主に仕える働きをすることによって、人は幸せを生きることができるようになりました。これは今も変わりません。また、「園を守らせた」とありますが、いったい何を守る必要があったのでしょうか。それはサタンへの侵入です。すでにサタンは地に投げ落とされていました。いつも主の教えを守り、主と共に歩んでいれば安全でした。主の教えはたった一つ、それは善悪を知る木の実を食べないことだけでした。これさえ守っていれば安全でした。しかし、誘惑するものがあり、その意味では霊的には安全な世界ではなく、園をしっかり守る必要があったのです。また神様はアダム一人ではなく助け手エバ（女性）を作り、一緒にこの働きをするようにしてくださいました。神様の働きは共同作業であり、共に喜びを分かち合い、共に守りあうということです。

【月曜日・侵入】

エデンの園は美しい花々や木々に囲まれ、可愛い鳥や動物たちがいて、そこから神様の御手の業や神様の愛をたくさん学ぶことができました。学習環境は完璧に整えられていたのです。ところが、野の生き物のうち最も賢い（狡猾な）へびが近づいて来て、人を誘惑するのです。人は善悪を知る木の実を食べることで禁じられていましたが、後は自由でした。そのためへびが誘惑するものは、ただ一つしかありませんでした。それにさえ勝利すれば、罪の侵入を許すことはなかったのです。守るべきことは、たった一つで良かったのです。しかしそれを守ることができませんでした。へびの言葉は巧みでした。まず、「園のどの木からも食べてはいけないなどと神は言われたのか」（創世記 3:1）と、問いかけます。神様は人間に、「園のどの木からも食べてはいけない」とは言われませんでした。まったく逆で、「園のすべての木から取って食べなさい」と言われたのです。「ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と付け加えられました。蛇はそのことをちゃんと知っていた上でわざと、「園のどの木からも食べてはいけないなどと神は言われたのか」と、いかにも驚いたように言うのです。まるでそれは、「そんなのひどいじゃないか、君たちがかわいそうだ」といわんばかりです。このとき「エバは、自分の心の思いが声となったのを聞いたような気がしてはっと驚いた」とエレン・G・ホワイトは解説しています。エバは「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました」（創世記 3:2, 3）と答えます。このエバの答えの中に神様への疑念が見え隠れしています。たとえば、神様は園の中央に生えている木の果実に「触れてもいけない」とは言っていませんし、「死んではいけないから」ではなく、「必ず死ぬから」と言われたのです。エバは園で神様から教えられたことを真剣に受け止めていなかったことがわかります。それはまだ、世界に死というものが存在しなかったからかもしれません。

【火曜日・メッセージを聞き逃す】

蛇はエバに「決して死ぬことはない」（送籍 3:4）と嘘をつきます。そして「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」と、食べてはいけない理由を、死んではいけないからでは

なく、人が神様のようにになったら神様の都合が悪くなるからだと言うのです。このときエバは会話を中断して、神様に真実を確認するべきでした。この世界には、神様を疑わせるもので満ちています。そのとき私たちは静まって祈り、謙遜な心で御言葉から真実を探って行かなければなりません。そうしないと、サタンの誘惑に引っ張られてしまいます。エバの心の中に芽生え始めた神様への疑念は、神様に問いかけることを妨げました。

【水曜日・失われたものを取り戻す】

人は罪を犯した結果、教室（エデンの園）から追放されることになりました。それによって失われた損失は計り知れません。神様との間の平和を失い、その代わりに悩み・痛み・苦しみ・悲しみ・不安、そして死が入り込んできました。神様の人類救済計画は、ある意味この失ってしまったものを取り戻すためのものであるとも言えます。キリスト教教育が目指すのは、この失われてしまったものの回復です。失ってしまったものは何か。どうすればそれを取り戻すことができるのか。それを教えることです。最初の学校は家庭です。子どもをどのように育てるのか、目標ははっきりしているのです。幸いなことに、この世界は罪によってすべてが失われてしまったわけではありません。美しい自然を見渡せば、神様の創造の業を見ることができます。信仰・希望・愛も残されています。その残されているものを通して、たくさんのことを学ぶことができます。そして、人は再創造されていくのです。ここに生きる意味があり、教育の目的・ゴールがあります。このゴールに向かわない教育は、意味がありません。

【木曜日・権威を侮る者たち】

「主は、信仰のあつい人を試練から救い出す一方、正しくない者たちを罰し、裁きの日まで閉じ込めておくべきだと考えておられます。特に、汚れた情欲の赴くままに肉に従って歩み、権威を侮る者たちを、そのように扱われるのです。彼らは、厚かましく、わがままで、栄光ある者たちをそしってはばかりません。ペトロの手紙二 2章 9、10 節

権威を侮る者たちを厳しく非難しています。同じ人間ですから、教える側の立場の人といえども、完璧な人はいません。それでも権威者に対して侮ったり、そしったりする者たちに対して主は裁かれます。謙虚な思いで学んでいく姿勢が大切です。ましてや神様は完全な方です。アダムとエバが神様に面と向かって侮ったわけではありませんが、間接的に神様の教えを軽く考えたのは大きな過ちでした。

ただ、「あなたがたの中にも偽教師が現れるにちがいません」（第二ペトロ 9:1）とも述べられています。そのため見分ける力も求められます。判断の基準は聖書です。聖書の教えを曲げたり、異端の教えを持ち込んでいないか見極めるためには、自分でもしっかり聖書を学んでいくことが大切です。